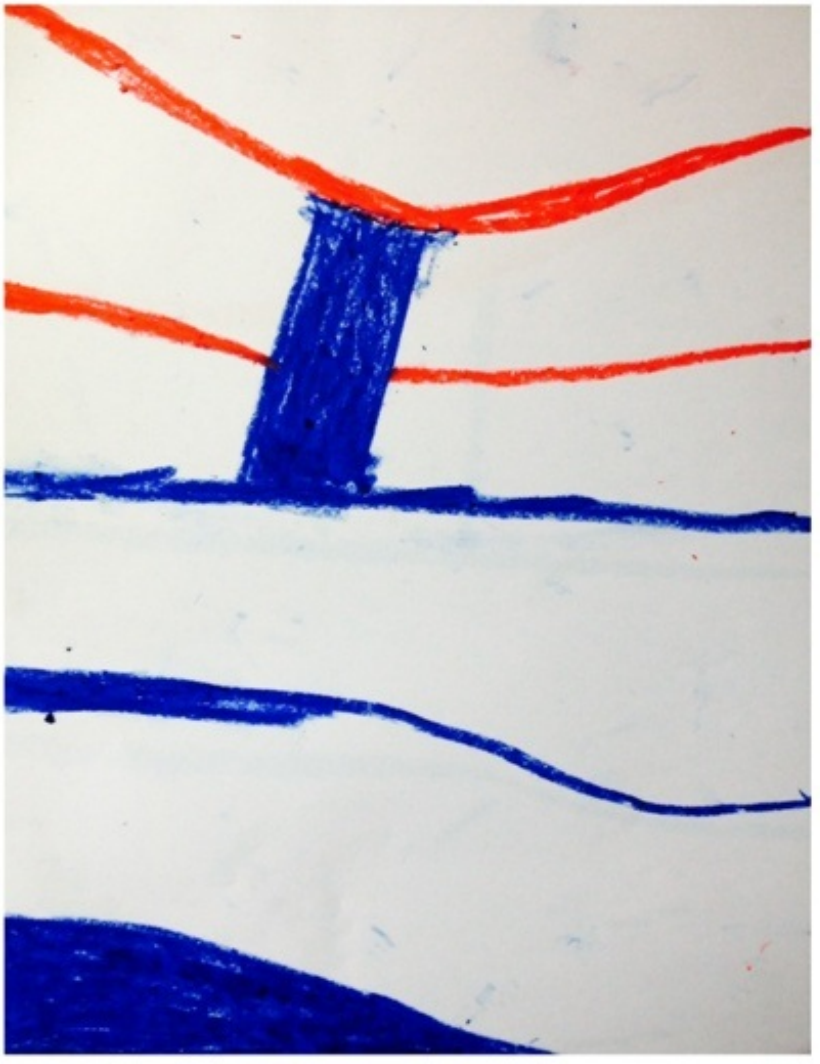

*
コンセントに　つながれて
たわしみたいな　イモを　たべてる
おれらのすむ　駐車場で
スヌーピーの　きぐるみをきた
入れ墨やくざが　コーナーにたってる

旅が　よつおりにされて
脅迫状のように
おれのせいそうにとどくのは
こわいことだから

虹をおなかにまいて
かん客のいない　横浜球場で
皇帝とかかれた　ボール球をうち
スタンド内で　ワンバウンドさせて
場外へおとした　おれの夢

あのこは　こんなにも
清くすんだ　空気と
二人羽おりを　したまま
雷鳥ともえる　耳をはじかせて
おれと　あいつに
やみの方を　みさせる

恋は　鏡の中だけに
あるようにも　みえるけど
あのこの命は　おどり場の
窓のすきま風に　息づいている

おれは　ドイツのおさけに
しずめられて
おれじしんのうでで　おれの色もうを
治せとせまられる
不良少年たちは　しろい光みょうにおおわれて
あのこの　黒ばん　だけが
チョークを
うけとれると話した

*
チーズで
かためてしまえば
それはそれでいい
チーズで
ひとつの物になってしまった
様様な週かんし

けんこうにわるいほどの
ビビッドな黄いろが
夕ぐれの
あのいろと
同じだという
そしてたぶんせつ明してもくつがえらない

ぼくはつなぎの洋服に
なってしまった朝の
ヒビをみている
きみはまきぞえを
くらって台どこの
そうじを今している

*
女子校の　おばけが　廊下をとおると

エメラルドの　白のティーシャツで
おれがとぶ

さそりたちの　窓べで
あくまが　十字架もって　立っている
さびた　寂しい　やねの下では
かなしい　サドルの　スプラッシュ

トランクケースに　スプーン　いっぱい
多目的室の　ダンボールの　すれる音に
おばけが　ベッドで　ひっくりかえる
と方にくれた　真夏のビル

ショベルが　ごめん　ごめん　といっていた
うしろを　むくと　おっかさんが撃たれた
カカシのように　どろぬまに　たおれこんだ
となりで　おっとさんが　しんだな　と
すぐ　つぶやいた

*
殺人者を　どんぶりにのせて
いっきにかきこむ　むなくその　悪さは
日々の　どうしうようもなない
あこがれの　つよいこん虫の
バラバラにされた　土の　うえに
わりばしのように　ささって　おわった

ベッドの　うえで　ねていると
ベッドの　したが　たいくつになる
ベッドの　したで　ねていると
夜の　時かんは　あみあみになる

カタツムリみたいに　夜をはうのなら
おれは　コウモリに　なりたいよ
おれは　ま夏を　むじんとうにある
そうごう遊具で　すごしたい

*
おれは　ナイフのような　気持でいたとき
じゃぐちを　ひねるのではなくて
藁のふくろから　たえきれず　垂れるような
悲しい水を　みたことがある

*
おれは　夜に　石だたみのうえで
ちいさな　四角の　ラベンダーをかかえて
君に　歌を　きかせたかった

バターに　万ねん筆を　もたせて
バンドが　はじまった
ドラムには　スーパーマーケットの　たてもの
そのものが　つかわれて
ユーセンの曲を　カバーした

納豆が　君の　あそこに　くっついている
でも　あじはまだ　青いれもん
セミのしがいのように　歌をうたった　痕があった

*
映画が　そっぽをむいている
そちらがわには
くろくこげたフライパンの上の　ちいさならんおうと
ランニングする　少年隊がみえる

ぼくらは　映画のせなかを　みつめていた
映画の眼は　一まいの
うすいかべに　とじこめられているのだとおもっていた
でも　おわりにさしかかるとき

映画が　きゅうにふりむいて
ぼくらのいる　きゃくせきをにらみつけた
ぼくらは　まぶしさにおどろいた
そして今度は　ぼくらが映画になった

*
夜　うみに　うたいにいったとき
だれかが　ボンゴをたたいて
うたっているのが
みなとの方から　きこえていた

かえるついでに　ふなつき場をのぞくと
人は　ひとりも居なかった
そのかわりに　かぜが
歌を　うたっているのをみた

かぜは　マストの　あさづなをゆらして
メトロノームをうち
そうだ室の　まどにふき付けて
ホーミーをしていた

ランプをあびて
あやしげに涙ぐむ　水ぎわに
こいつはどうだと
かいてきたばかりの歌を
きかせていた

ぼくは
また　いつかここにきたとき
かぜのうたう
叫びと一しょに
ぼくの歌を
うたいたいとおもった

*
ガラスが　卵をうんで
外気にふれて　すぐツブれた
もしも　この暖ろがぬくい
窓のうち側へ　出てきたのなら
今すぐ　おれの子になったのに

*
ふっとうする　なべの中
豆ふにまぎれて　こきゅうしている
きみの　口ないに　入るちょくぜんで
人にすがたをかえ　せっぽうしようとしている
ビンボーで　さびさびの
やさぐれた　ベンチがいる
げんのない　ギターのように
おとなのあそびに　つかわれている
つがいの　かたいっぽーがにげて
しょんぼりして居る　ジューシマツのかげが
夕やけの　なべへ　おちていき
まずいカレーの　できあがる

*
かみ　ゆい上げて　クスリ指なめて
氷にさわって　春がきたんや

ぶしょうひげ　はやした　春さきの風が
ゼリーに吹いて　おれらのはしる

台の上で　トランプを　いれかえて
そうすれば　時間はいまごろ　ここにはない

トランプは　同じしゅるいしかないけど
いれかえただけで　いのちが曲がる

でもあんたは　こういうねやろ
「わたしは　わたしを　しんじてないけど」
「あなた　みたいに　なりたくない」

孤独の　お冷やは　もう　うんざりや

はじめて　いく　いく　のかわりに
正しい　正しい　というコをみたし

ちまみれで　わらいあう　平行ぼうの
弁当ばこ　かかえて
雨の上を　あるいていくのをみたし

*
おれは　はりがみのように
ぺったんと　はり付いて
とれなくなってしまった
夜のことを　おもい出してる
その晩　みんなが
アホウドリになる
夢をみたらしい

そしておれだけが葬儀屋になる夢をみた
*
お湯を
じゅうたんにこぼして
夜がすぎても
ねっきがおさまらない

いたみのカーテンをあけると
おおすぎる光の中で
いくつもの墓がとんでいる

いちばん上の高い所で
つり人がつりをしていて
つり堀にかくれこんでいるのは
ぼくをよくしる人人だ

えさの墓石に　しがみついて
ああ　ついにバケツに入ってしまった
カーテンがひかり　まどがひかり
そのじゅんばんで　たしかにおいかけてくる

*
ああ　しんだおじいちゃんの
立てかけた写真
おれがねてるすきに
うで立てふせを　始めた

のこぎりで　きるような音をたてて
床いたを　きしませる
おれの　おじいちゃん
ああ　きこえるよ
どうしても　マンションじゅうにひびきわたる
悲しみの　うで立てふせ

ああ　まっくらな室で
カーテンの　わずかなすき間から
虫たちの顔がみえている
ここに　たまごをうえつけて
外をみえなくしてしまうんだ

つくえの上のスタンドは
明るすぎるほどに　明るい
じくうのわれめから
あすへのボートが　ながれついてくる

さて　午後のまちは

虫のうごめく
ひろい巣のようだ
そして　空にうかび上り
たんかをきって
ぼくがはしり出す

さそりたちの窓べで
こんやも葬式　やっている
さそりたちのベッドで
夜の時かんが　あめいろにかわる

ああ　雨はどこから流れでて
あんなふうに　こまい滴になるのだろう
とくにさむい　さそりたちのまちでは
かたまったそれが　こおどりはじめる

万ねん筆の　にぶいペン先は
ずっと先のことをふあんししている
筒じょうになった　夜のきずぐちを
階段のうえで　よくしらべてみる

その　血のなかに

おれを　みつけて

おれはまだ　雨を

みたことが　ない